

# ① 境界線なんか、引き直せばいいべさ

日本の東の方で北の方、県境の方で山の奥に、春田さんが暮らす大高村がある。

春田さんがつくるナスは「上等も上等」と評判で、春田さんはナス名人なんて呼ばれているんだけど、もうひとつ、春田さんが名人級に達者なのが算数だあ。

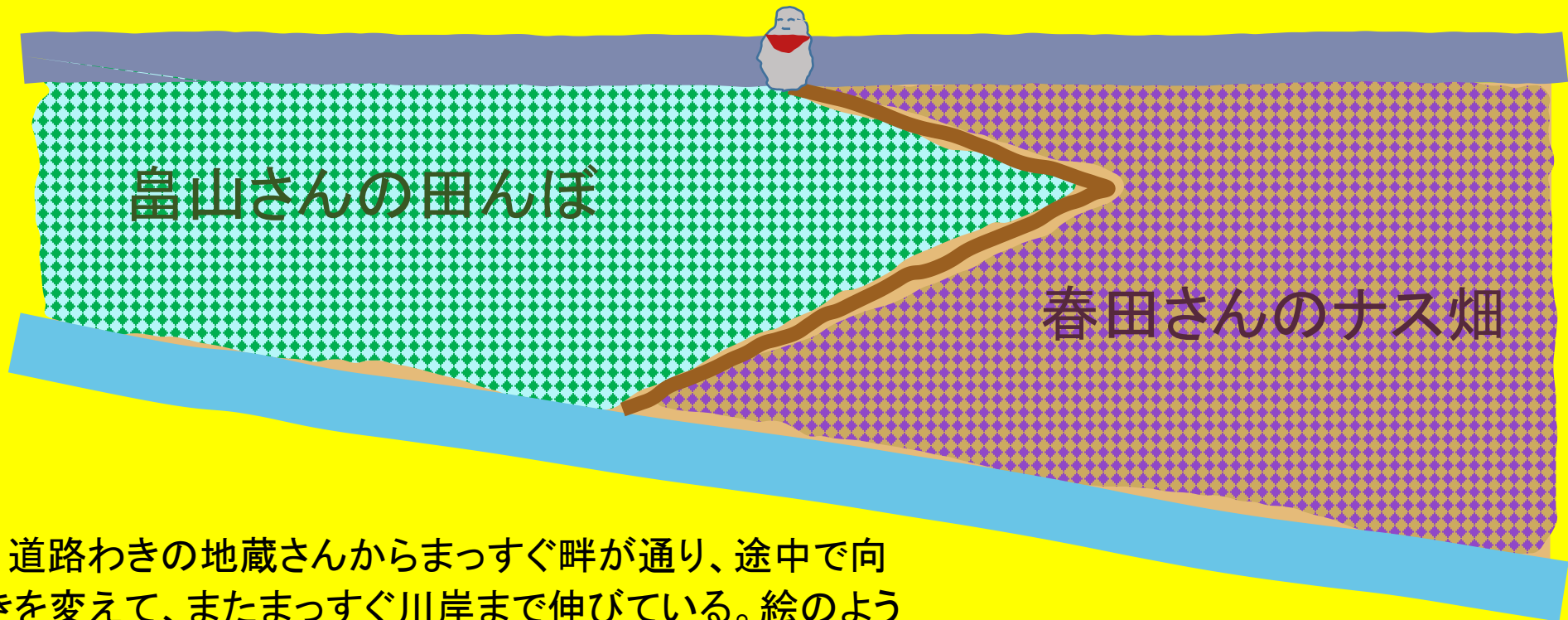
これ、知る人ぞ知る事実。春田さんのもとには困りごとの相談を持ち寄る人が絶えねえ。

春田さんの知恵を借りたい、という思いはみな同じで、頼りにされる存在、っでごと。



さて、その大高村の一角に、まっすぐな道とまっすぐな川に挟まれた農地があった。

畠山さんの田んぼと春田さんのナス畑だあ。



道路わきの地蔵さんからまっすぐ畔が通り、途中で向きを変えて、またまっすぐ川岸まで伸びている。絵のような感じで。

この畔が2人の土地の境界線だあ。

何でこんなくさび型の境界になったかは知んねえけど、この境界のおかげで、畠山さんも春田さんも田畑が耕しにくい。日々の作業にも何かと不都合が絶えねえ。

春田さんは畠山さんと呼んで話し合った。  
「いったん、この畔を崩して、境界線を引き直すべ」  
「土地の広さが変わらねんだば、おらもそれでいい」  
と畠山さん。

毎年、豊作をもたらしてくれる地蔵さんから、川岸まで  
一本の直線を新しい境界にしたい。どんな具合に線を  
引いたらえんだべか？

2人とも、測量の道具など持ち合わせていねえ。長い口  
ーブなら何本もあんだけど・・・。

春田さん、考えた。  
『おんなじ面積同士、交換さできれば・・・』

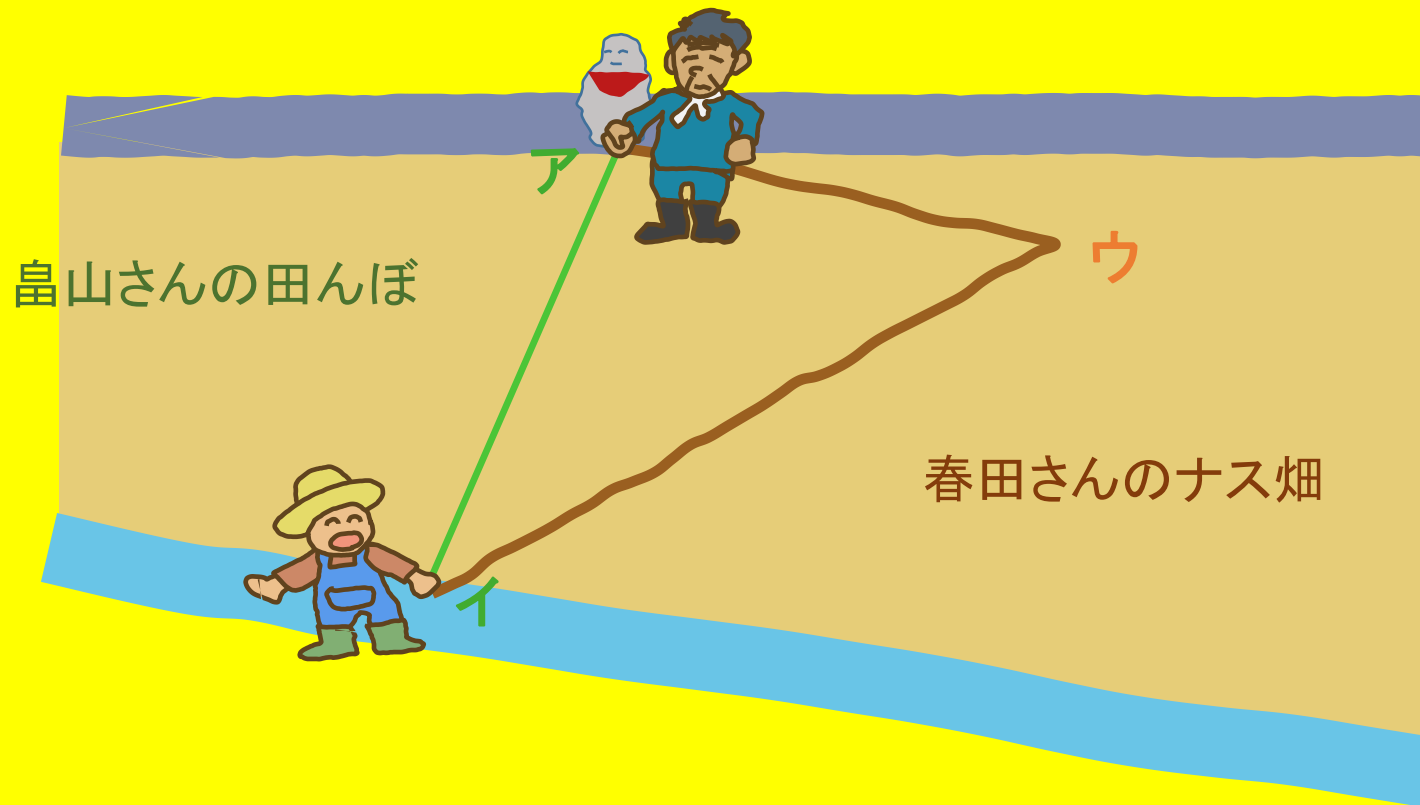


耕しにぐいずら

ナス名人の  
春田さん

次の日、春田さんは畠山さんを畑に呼んだ。  
春田さん、地蔵の前に立って、畠山さんにいった。  
「おめ、このロープのはじさ持って、川岸の畔の終点まで歩け」

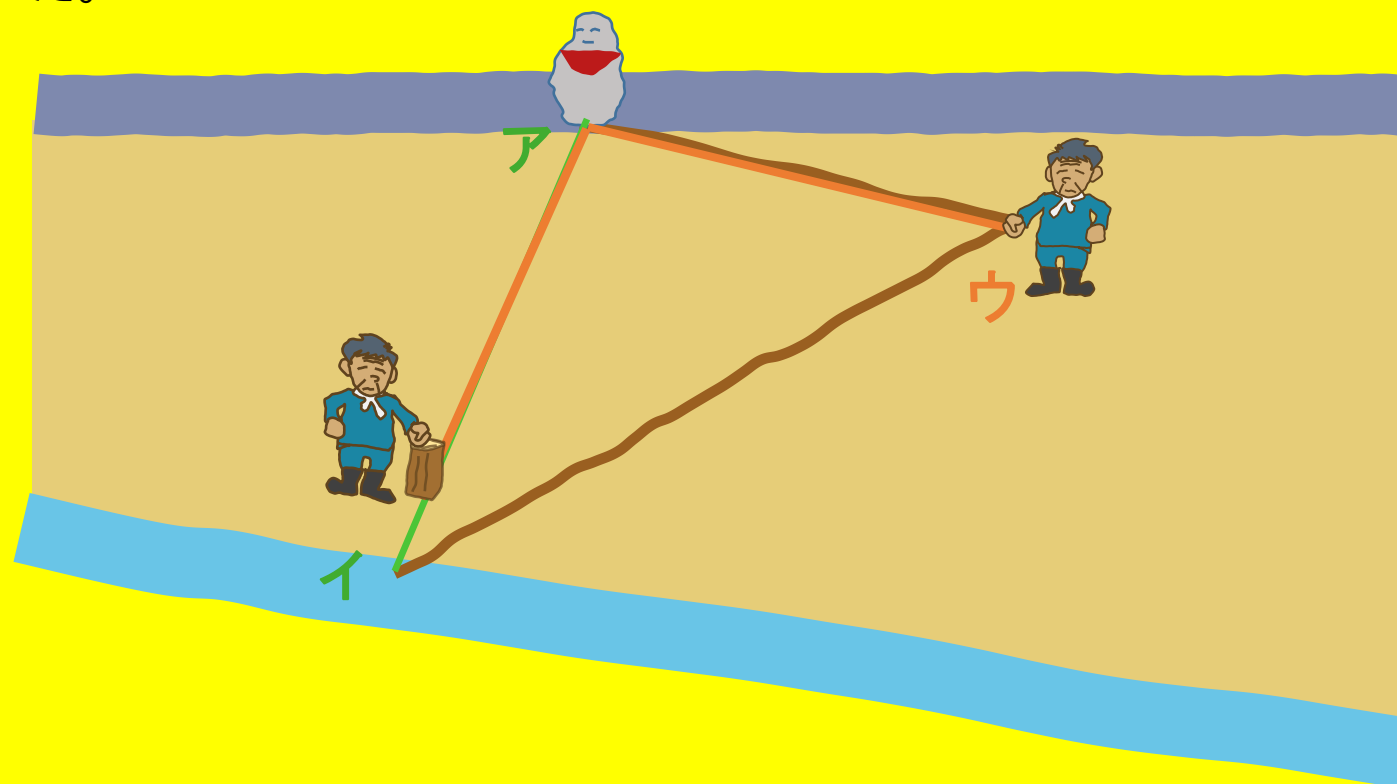
2人は、地蔵と畔の終点に立って、長いロープをピンと張った。両はじを固定して、絵のようにアとイを結ぶ直線をつくった。



次に春田さんは、別のロープ2本を地蔵に結び、ロープのはじをもって畔を歩いた。

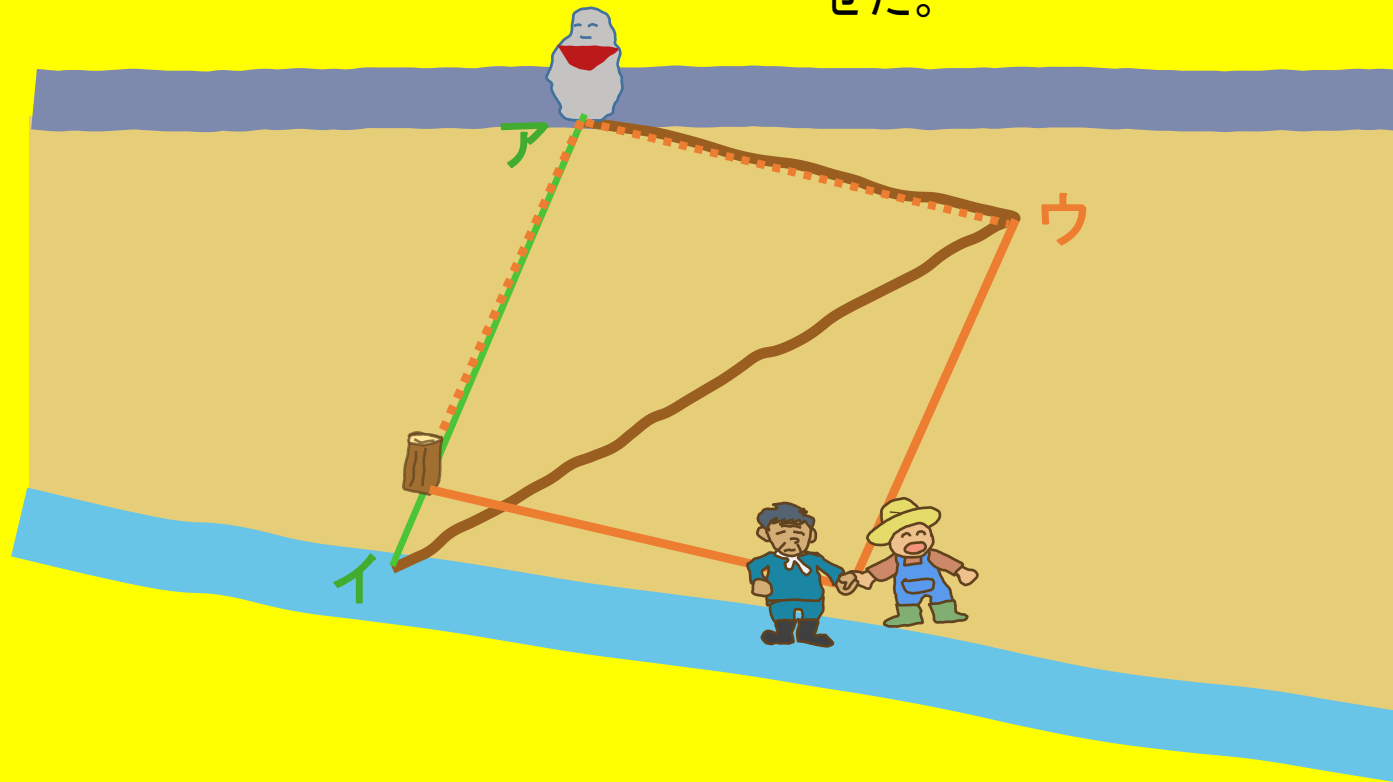
畔の折れ曲がりの地点、絵のウの点に来て、春田さんは地蔵からの距離、アとウの間の長さがわかるように2本のロープに印をつけた。

すると春田さん、うち一本を地蔵から直線アイに重ね、印のところに杭を打った。



休みもとらずに2人は作業を続けた。地蔵から2本のロープをほどき、1本のはじを今打った杭に結びなおした。

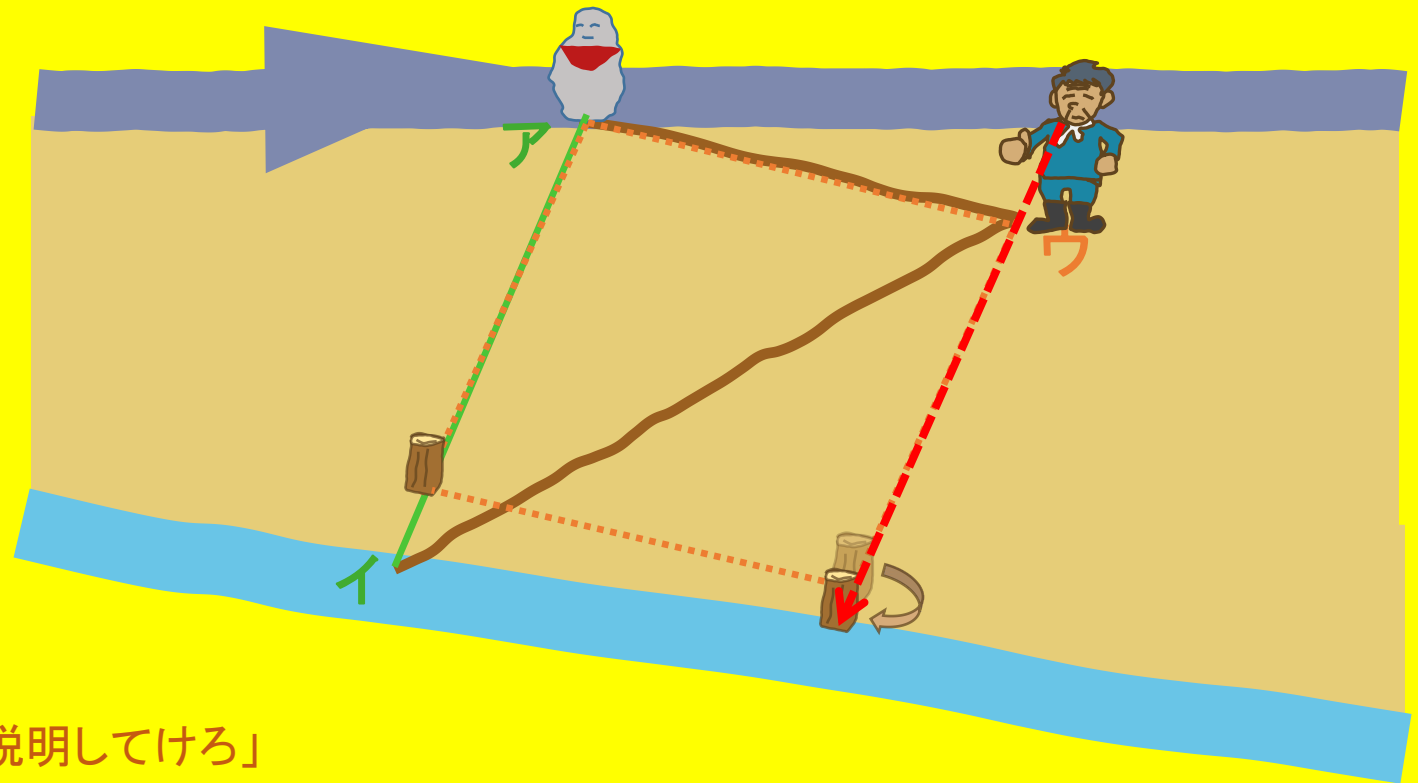
畠山さんには、もう一本のロープのはじをウに固定させた。



そして、それぞれのロープをもって畑に踏み入り、印をつけた長さでピンと張るようにしたまま、はじとはじが重なる点に2本目の杭を打った。

その後春田さんは、ウに立って、いま打った杭をながめた。そして、杭の先、まっすぐ川岸にぶつかる点に杭を打ちなおさせた。

作業は、ほぼ終わった。  
春田さんは畠山さんにいった。  
「最後に打った川岸の杭と地蔵さんを結ぶ直線が新しい境界線だあ」

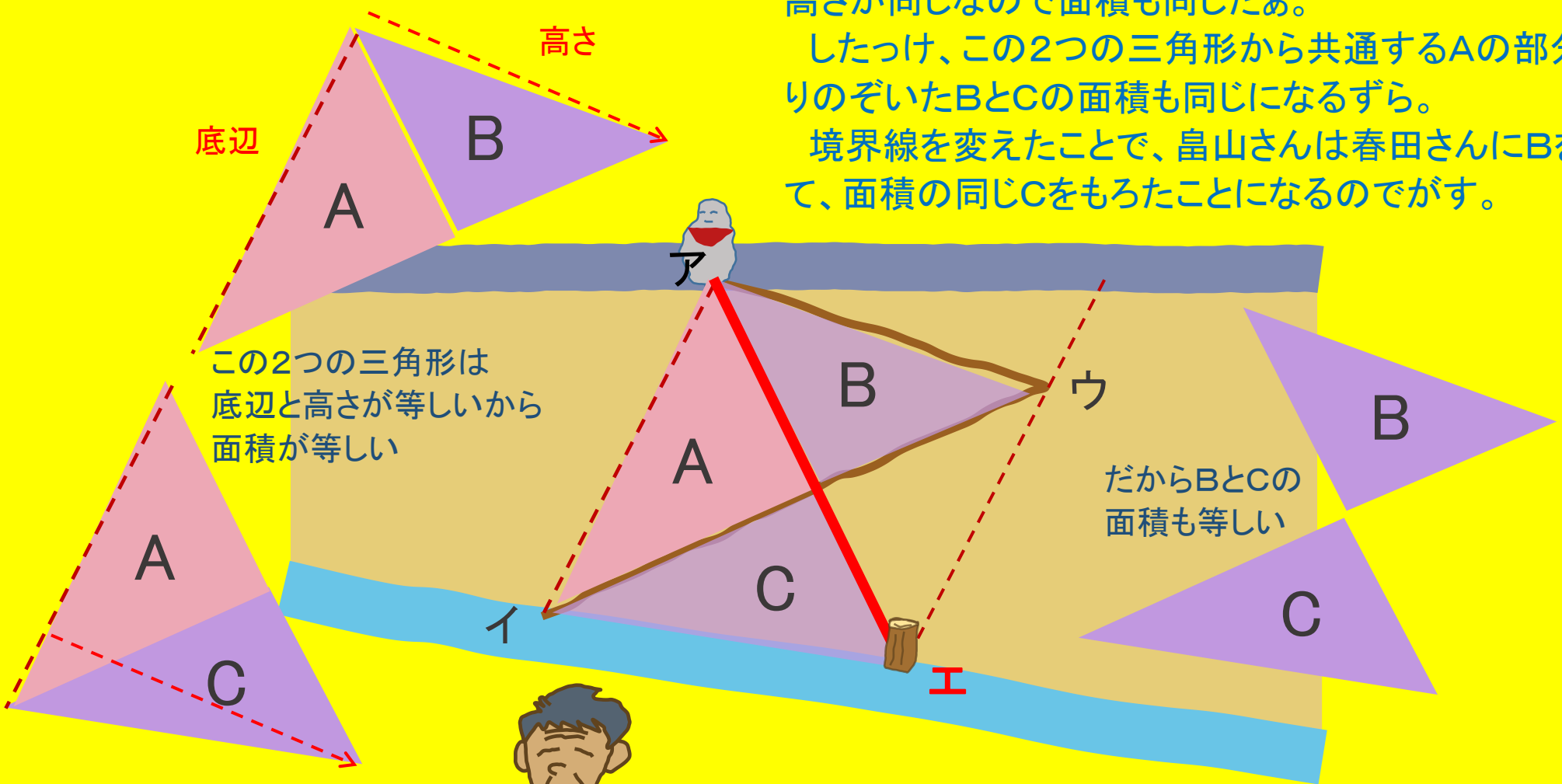


「おれ、わかんねっけ、説明してけろ」  
畠山さんは春田さんに聞いた。  
春田さんの説明は、こういうことだった。

三角形アイウと三角形アイエは、アイを底辺とみると、高さが同じなので面積も同じだあ。

したっけ、この2つの三角形から共通するAの部分をとりのぞいたBとCの面積も同じになるずら。

境界線を変えたことで、畠山さんは春田さんにBをくれて、面積の同じCをもろたことになるのですが。



この2つの三角形は底辺と高さが等しいから面積が等しい

だからBとCの面積も等しい

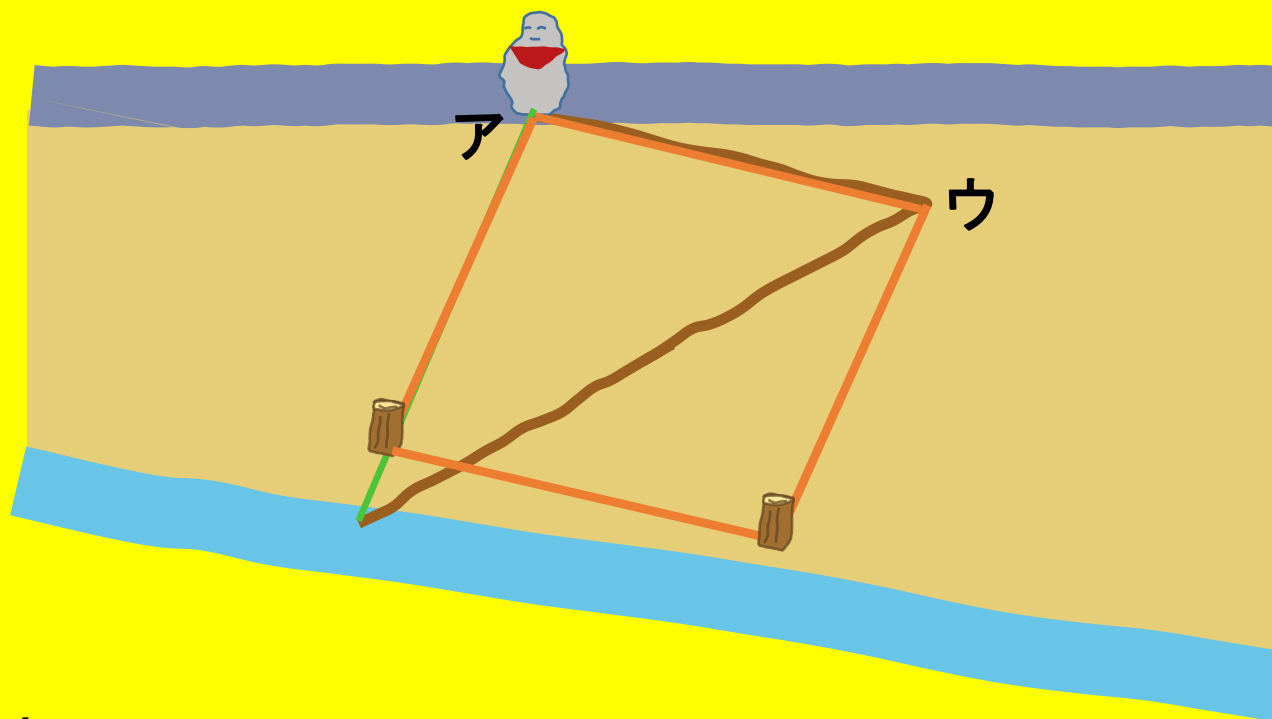
これで耕しやすいずら

「なして高さが同じになんだあ？」  
畠山さんはまた、春田さんにきいた。





さっきの作業でわがったと思うけど、アとウ、最初の2本の杭でできた四角形の4辺はみな同じ長さだ。  
これはひし形ちゅうて、平行四辺形の仲間だ。  
平行四辺形は向かい合う辺同士が平行だから…って、みなまでいわす気があ？



「合点がいった！」  
と畠山さん。



Bをくれて  
Cもろたぞ、母ちゃん

「腹へったから帰えるぞ」  
「今日は、ナスの天ぷらだあ」



今年も  
豊作じゃ